



物語文のテキストにおける内容と述語形態とのかかわり : 『蜘蛛の糸』を中心に

著者	野村 美穂子
雑誌名	日本語と日本文学
巻	14
ページ	L16-L26
発行年	1991-02-20
URL	http://doi.org/10.15068/00161962

物語文のテキストにおける内容と 述語形態とのかかわり

——『蜘蛛の糸』を中心に——

野 村 美 穂 子

1. はじめに

本稿は談話の中でも特に物語文のテキストを対象に、その内容と形とのかかわりを見ることを目的とするものである。このように相互にかかわりのある複数の文のまとまりを対象とする研究では、現在のところ、まだ定着した用語が用いられてはおらず、研究者によってそれぞれ術語の使い方が異なっている。以下では、便宜上、そういったひとまとまりの文を談話と称し、そのうち特に書記表現によるものをテキストと呼ぶことにする。談話の内容とその内部の文の形との関係に注目したこれまでの主な研究としては、Hopper (1979), Longacre (1983), Weinrich (1971) などのほか、日本語のものに関しては、牧野 (1983), 曾我 (1984), 池上 (1986) などが挙げられる。以下これらの先行研究を参考にした上で、主に物語文の内容と個々の文の形態とのかかわりについて探っていくことにする。

2. 問題点と分析法

談話は、ひとつのまとまった概念をあらわす形式であるが、その内容によって、論説文や手続き文などいくつかの種類に分けられる。その中で、物語文は、始まりから終わりへと時間の流れを追って進んでいくあるひとつのできごとが、語り手（書き手）の頭の中で再構成されて聞き手（読み手）に提示されたものである。再構成によってももとのできごとの時間の流れが崩れていないという点が物語文の特徴である。これを欠くと、同じものごとの再構成でも、物語文ではなく例えば説明文などになってしまう。物語文は、原則的には、「ある一定の関係要素（登場人物など）に関して、その変動（できごとの進展）を時間の流れに沿って記述していく」ことを特徴とする。

ひとつのできごとを言語表現として構成するのにはいろいろなやり方がある。単に書記表現の場合のみを考えても、ひとつのできごとはひとつの物語文としてしか再構成できないわけではない。例えば、視点をどこに置くか、あるいは、どの程度詳細に記述するかなどの違いによって、さまざまな物語文が得られる。しかし、もとのできごとが同じであれば、それらの物語文には共通する要素が必ずあるはずである。この要素は物語の構成にとって欠くことのできない文であり、いわゆる「あらすじ」の部分成形作ることになる。このように見ていくと、物語文は、あらすじとなる談話の骨格の部分とそれ以外の修飾の

部分とに大きく二分されると考えられる。このあらすじ部分とそれ以外の部分とでは形の上では何らかの違いはないのだろうか。このことを考えるためにまず談話ではなく単一の文を試みる。

(1) アリスはその猫が笑うのを見た。

(2) 天気がよいので傘を持たずに出かけた。

(3) 前の席の人が貧乏揺すりをするので、私は気が散ってしかたなかった。

(1)～(3) のような文は主節と従属節という構造を持っており、そのふたつが一緒になってひとつの文としての全体をなしている。こういった文においては、主節が全体の骨格をなしていると考えられる。骨格となる主節とそれを土台とする従属節との形の上での違いを考えてみると、例からもわかるように、従属節には必ずしも時制などが顕現しなくてもよいという述語の形の特徴が見られる。談話においてもあらすじの部分を骨格と考え、それ以外の部分はその骨格の部分を補完して全体をなしていると考えた上で、単一の文と談話とが相似した関係にあると仮定すると、談話の場合にもこのような形の上での違いが見られるのではないかと考えられる。例えば (3) の文は

(4) 私は気が散ってしかたがなかった。前の席の人が貧乏揺すりをするのだ。

という談話に書き換えることもできるが、この場合にも、もとの文で従属節であった部分は時制が顕現する必要がない。このようなことから見ても、物語文の談話の中で、あらすじとなる部分とそれ以外の部分とでは述語の部分に形の上での違いが出てくるのではないかと考えられる。物語文は、「ある一定の関係要素（登場人物など）に関して、その変動（できごとの進展）を時間の流れに沿って記述していく」ものであるという定義からすると、変動の部分とその前後の状態をあらわす部分とに分かれると考えられるので、このことに注目して、物語文の内容と形態との何らかの傾向性を探り出すために、以下の手続きをとることにする。

①物語文から、内容的に見た「変動部」と「無動部」を取り出す。

②①で取り出したそれぞれの部分の述語の形を見る。

③各部分の述語に何らかの特徴があるかどうかを検討する。

実際問題としては、変動部や無動部を客観的に取り出すというのは簡単なことではない。本稿ではとりあえず筆者の内省に基づいて次のように判断することにする。すなわち、その部分の文の示すことがらによって内容的にある状態が次の状態へと変化しそこに時間的な進展がある場合に、その文を変動部と判断し、時間的進展のあるその変動の前後の状態をあらわしそれ自体では時間的進展のない部分の文を無動部と判断することで、まず大まかな傾向を見ていくことにする。分析の対象としては芥川龍之介の短編『蜘蛛の糸』を選んだ。全体の長さが適当で、内容も一般によく知られており、また、筋が単純で扱いやすいことなどがその理由である。①～③の基準に従い、実際に『蜘蛛の糸』の全文の述語を分析して以下に表としてまとめた。文番号を○で囲んだものが変動部と考えられる文、()で囲んだものが無動部と考えられる文である。

3. 「蜘蛛の糸」全文の分析

・第一章

段	文	述 語 の 形
1	1 ある日のことでございます。	Nダ(現)
	(2) お釈迦様は極楽の蓮池のふちを、ひとりでぶらぶらとお歩きになっていらっしゃいました。	Vテイル(過)
	(3) 池の中に咲いている蓮の花は、みんなまっ白で、そのまん中にある金色の蕊からは、なんとも言えない <u>よいにおい</u> が、絶間なくあたりへあふれております。	Vテイル(現)
	4 極楽はちょうど朝なのでございましょう。	Nダ(現)ノダダロウ(現)
2	① やがてお釈迦様はその池のふちにおたちになって、水の面をおおっている蓮の落の間から、すと下のようなすをご覧になりました。	V(過)
	2 この蓮の池の下は、ちょうど地獄の底に当たっておりますから、水晶のような水を透きとおして、三途の河や針の山の <u>けしき</u> が、ちょうどのぞきめがねを見るように、はっきりと見えるのでございます。	V(現)ノダ(現)
3	① するとその地獄の底に、 <u>毘陀多</u> と言う男が一人、ほかの罪人といっしょにうごめいている姿が、お眼に止まりました。	V(過)
	2 この <u>毘陀多</u> と言う男は、人を殺したり家に火をつけたり、いろいろ悪事を働いて大どろぼうでございますが、それでもたった一つ、よいことをいたした覚えがございます。	V(現)
	3 と申しますので、ある時この男が深い林の中を通りますと、 <u>小さな蜘蛛が一匹、路ばたをはって行くのが</u> 見えしました。	V(過)
	4 そこで <u>毘陀多</u> はさっそく足をあげて、踏み殺そうといたしました。が、「いや、いや、これも小さいながら、命のあるに違いない。その命をむやみにとるということはいくらなんでもかわいそうだ」と、こう急に思い返して、とうとうその蜘蛛を殺さずに助けてやったからでございます。	Nダ(現)
4	① お釈迦様は地獄のようすをご覧になりながら、この <u>毘陀多</u> には蜘蛛を助けたことがあるのをお思い出しになりました。	V(過)
	② そうしてそれだけのよいことをした報には、できるなら、この男を地獄から救い出してやろうとお考えになり	V(過)

	ました。	
(3)	幸、そばを見ますと、翡翠のような色をした蓮の葉の上に、極楽の蜘蛛が一匹、美しい銀色の糸をかけております。	Vテイル(現)
④	お釈迦様はその蜘蛛の糸をそっとお手にお取りになって、玉のような白蓮の間から、はるか下にある地獄の底へまっすぐにそれをおおろしなさいました。	V(過)

・第二章

段	文	述 語 の 形	
1	1	こちらは地獄の底の血の池で、ほかの罪人といっしょに、浮かんだり沈んだりしていた犍陀多でございます。	Nダ(現)
	(2)	なにしろどちらを見ても、まっ暗で、たまにその暗からぼんやり浮き上がっているものがあると思いますと、それは恐しい針の山の針が光るのでございますから、その心細さといったらございません。	A(現)
	(3)	その上あたりは墓の中のようにしんと静まり返って、たまに聞えるものといつては、ただ罪人がつくかすかな嘆息ばかりでございます。	Nダ(現)
	4	これはここへ落ちて来るほどの人間は、もうさまざまに地獄の責苦に疲れはてて、泣き声を出す力さえなくなっているのでございましょう。	Vテイル(現)ノダ ダロウ(現)
	(5)	ですからさすが大どろぼうの犍陀多も、やはり血の池の血にむせびながら、まるで死にかかった蛙のように、ただもがいてばかりおりました。	Vテイル(過)
2	1	ところがある時のことでございます。	Nダ(現)
	②	何気なく犍陀多が頭をあげて、血の池の空を眺めますと、そのひっそりとした暗の中を、遠い遠い天上から、銀色の蜘蛛の糸が、まるで人目にかかるのを恐れるように、一すじ細く光りながら、するすると自分の上へたれて参るのではございませんか。	V(現)ノダ否疑 (現)
	③	犍陀多はこれを見ると、思わず手を拍って喜びました。	V(過)
	4	この糸にすがりついて、どこまでものぼって行けば、きっと地獄からぬけ出せるのに相違ございません。	V可(現)ノダ(現) ニソウイナイ(現)
	5	いや、うまく行くと、極楽へはいることさえもできましよう。	V可ダロウ(現)
	6	そうすれば、もう針の山へ追い上げられることもなくなれば、血の池に沈められることもあるはずはございません。	V(現)ハズダ否 (現)
3	①	こう思いましたから犍陀多は、さっそくその蜘蛛の糸を	V(過)

		両手でしっかりとつかみながら、いっしょうけんめいに上へ上へとたぐりのぼり始めました。	
	2	もとより大どろぼうでございますから、こういうことには昔から、慣れ切っているでございます。	Vテイル(現)ノダ(現)
4	1	しかし地獄と極楽との間は、何万里となくございますから、いくらあせてみたところで、容易に上へは出られません。	V可否(現)
	②	ややしばらくのぼるうちに、とうとう <u>韃陀多</u> もくたびれて、もう一たぐりも上の方へはのぼれなくなっていました。	V可否テシマウ(過)
	③	そこでしかたがございませんから、まず一休み休むつもりで、糸の途中にぶらさがりながら、はるかに目の下を見おろしました。	V(過)
5	(1)	すると、いっしょうけんめいにのぼった甲斐があって、さっきまで自分がいた <u>血の池</u> は、今ではもう暗の底にいつの間にかかくれております。	Vテイル(現)
	(2)	それからあのぼんやり光っている恐しい <u>針の山</u> も、足の下になってしまいました。	Vテシマウ(過)
	3	この分でのぼって行けば、地獄からぬけ出すのも、存外わけがないかもしれません。	A(現)カモシレナイ(現)
	④	<u>韃陀多</u> は両手を蜘蛛の糸にからみながら、ここへ来てから何年にも出したことのない声で、「しめた。しめた」と笑いました。	V(過)
	⑤	ところがふと気がつきますと、蜘蛛の糸の下の方には、数限りもない <u>罪人たち</u> が、自分ののぼったあとをつけて、まるで蟻の行列のように、やはり上へ上へと のぼって来るではございませんか。	V(現)ダ否疑(現)
	(6)	<u>韃陀多</u> はこれを見ると、驚いたのと恐しいのとで、しばらくはただ、ばかのように大きな口をあいたまま、眼ばかり動かしておりました。	Vテイル(過)
	7	自分一人でさえ、断れそうな、この細い <u>蜘蛛の糸</u> が、どうしてあれだけの人数の重さに堪えることができました。	V可ダロウ(現)
	8	もし万一途中で断れたといたしましたら、せっかくここへまでものぼって来たこのかんじんな自分までも、もとの地獄へさか落しに落ちてしまわなければなりません。	Vテシマウナケレバナラナイ(現)
	9	そんなことがあったら、大変でございます。	A(現)
	(10)	が、そういううちにも、 <u>罪人たち</u> は何百となく何千となく、まっ暗な血の池の底から、うようよとはい上 がって、細く光っている蜘蛛の糸を、一列になりながら、せっせとのぼって参ります。	V(現)

	11	今のうちにどうかしなければ、糸はまん中から二つに断れて、落ちてしまうのに違いありません。	V シテシマウ(現) ノダ(現)ニチガイ ナイ(現) V(過)
6	①	そこで <u>犍陀多</u> は大きな声を出して、「こら、罪人ども。この蜘蛛の糸は己のものだぞ。お前たちはいったい誰に尋いて、のぼって来た。おりろ。おりろ」とわめきました。	
7	1	そのとたんでございます。	Nダ(現)
	②	今までなんともなかった <u>蜘蛛の糸</u> が、急に犍陀多のぶらさがっている所から、ぶつりと音を立てて断れました。	V(過)
	3	ですから <u>犍陀多</u> もたまりません。	A(現)
	④	あつと言う間もなく風を切って、独楽のようにくるくるまわりながら、見る見るうちに暗の底へ、まっさかさまに落ちてしまいました。	V テシマウ(過)
8	(1)	あとにはただ極楽の <u>蜘蛛の糸</u> が、きらきらと細く光りながら、月も星もない空の中途に、短くたれているばかりでございます。	V(現)バカリダ (現)

・第三章

段	文	述 語 の 形
1	① <u>お釈迦様</u> は極楽の蓮池のふちに立って、この一部始終をじっと見ていらっしゃいましたが、やがて <u>犍陀多</u> が血の池の底へ石のように沈んでしまいますと、悲しそうな顔をなさりながら、またぶらぶらお歩きになり始めました。	V(過)
	2 自分ばかり地獄からぬけ出そうとする、 <u>犍陀多</u> の無慈悲な心が、そうしてその心相応な罰をうけて、 <u>元の地獄へ落ちてしまったのが</u> 、お釈迦様のお目から見ると、あさましく思召されたのでございましょう。	V(過)ノダダロウ (現)
2	(1) しかし極楽の蓮池の <u>蓮</u> は、少しもそんなことにはとんじゃくいたしません。	V 否(現)
	(2) その玉のような白い花は、お釈迦様の御足のまわりに、ゆらゆら萼を動かして、そのまん中にある金色の蕊からは、なんとも言えないよいにおいが、絶間なくあたりへあふれております。	V テイル(現)
	3 極楽ももう午に近くなったのでございましょう。	V(過)ノダダロウ (現)

以上が「蜘蛛の糸」の全文である（参考のため、その文の主述語の主語が顕現している箇所には下線を付してある）。述語の形の部分には、品詞、文の肯否、時制、アスペクト、

ムードなどの形を簡略化して表記した¹⁾。

4. 物語の内容と述語の形との関連

内容の各部分ごとに述語の形を見ていく。

4.1. 変 動 部

まず、表の中で文番号に○をつけた変動部の文に限って見ていく。第一章の変動部とされる文は全部で5文だが、これらはすべて動詞述語で、時制は過去、アスペクトについてもムードについても無標である。第二章の変動部は全部で10文であり、すべて動詞述語である。そのうち時制が過去で、アスペクトもムードも無標のものが6文、ムードが有標で時制は過去になっているものが2文、動詞の現在形に否定疑問の形がついて現在時制をとっているものが1文、動詞の現在形にムードの「ノダ」がついて否定疑問の現在となっているものが1文である。第三章は非常に短いもので、変動部は1文であり、動詞述語であって、過去時制でアスペクトもムードも無標である。全体を表にまとめると次のようになる。

品 詞	動 詞	16
	他	0
時 制	過 去	14
	現 在	2
ア ス ペ ク ト	無 標	16
	有 標	0
ム ー ド	無 標	14
	有 標	2

4.2. 無 動 部

次に、表の中で（ ）で囲んだ文番号の文を見ていく。第一章の無動部は全部で3文で、すべて動詞述語、時制は過去のものが1文と現在のものが2文であり、アスペクトはすべて有標で「テイル」の形をとっている。またムードに関してはすべて無標である。第二章の無動部は全部で8文で、そのうち動詞述語が6文、名詞あるいは形容詞の述語が2文である。過去時制は3文で現在時制が5文、動詞述語の6文の中でアスペクトが有標のものは5文ある。ムードに関しては、すべて無標である。第三章の無動部は全部で2文であり、どちらも動詞述語である。時制は現在で、「テイル」のアスペクトをもつものが1文あり、ムードについてはどちらも無標である。

品 詞	動 詞	11
	他	2

時 制	過 去	4
	現 在	9
ア ス ペ ク ト	無 標	2
	有 標	9
ム ー ド	無 標	13
	有 標	0

4.3. その他の部分

当初の予想では物語文は変動部と無動部とに二分されるはずであったが、実際のテキストを見てみると、そのどちらにも含まれない部分がある。この部分は、内容的に見て、時間的進展のある変動の部分でもなければその前後の状態をあらわしているわけでもない。ここには、例えば、

(5) ある日のことでございます。(第一章1—1)

のような場面の枠組みを設定する部分や、あるいは

(6) この轆陀多と言う男は、人を殺したり家に火をつけたり、いろいろ悪事を働いた大どろぼうでございますが、それでもたった一つよいことをいたした覚えがございます。と申しますのは、ある時この男が深い林の中を通りますと、小さな蜘蛛が一匹、路ばたをはって行くのを見えました。そこで轆陀多はさっそく足をあげて、踏み殺そうといたしました「いや、いや、これも小さいながら、命のあるものに違いない。その命をむやみにとるということはいくらなんでもかわいそうだ」と、こう急に思い返して、とうとうその蜘蛛を殺さずに助けてやったからでございます。(第一章3—2, 3, 4)

のように物語の中心を一貫して通っている時間軸からはずれた時間軸に沿ったできごとをあらわす部分、また

(7) この糸にすがりついて、どこまでものぼって行けば、きっと地獄からぬけ出せるのに相違ございません。いや、うまく行くと、極楽へはいることさえもできましょう。そうすれば、もう針の山へ追い上げられることもなくなれば、血の池に沈められることもあるはずはございません。(第二章2—4, 5, 6)

のように語り手が轆陀多になりかわってその心情を直接表現する部分、

(8) もとより大どろぼうのことでございますから、こういうことには昔から慣れ切っているでございます。(第二章3—2)

のように語り手自身の説明や意見を示す部分などが含まれている。これらに共通して言えるのは、いずれの場合も語り手自身が物語に大きく関わっているということである。変動部や無動部とは異なる内容を持つ部分として、この部分を「語り手関与部」と呼ぶことにする。この語り手関与部を個別に見ていくと、第一章では全部で6文あり、動詞述語が3文と名詞述語が3文である。時制に関しては、過去が1文、現在が5文で、動詞述語3文

のAspectはすべて無標である。また、ムードに関しては、全6文の中で「ノダ」を持つ有標のものが2文ある。第二章の語り手関与部は全部で15文あり、そのうち動詞述語の文が9文、名詞述語の文が3文、形容詞述語が3文である。時制はすべて現在で、動詞述語9文のAspectは、無標が7に有標が2である。ムードに関しては、無標のものが6文、有標のものが9文である。第三章は全部で2文の語り手関与部を含んでおり、ともに動詞の過去形に「ノダ」と「ダロウ」というムード形式がついて現在の形をとっているものである。Aspectに関しては2文とも無標である。

品 詞	動 詞	14
	他	9
時 制	過 去	1
	現 在	22
ア ス ペ ク ト	無 標	12
	有 標	2
ム ー ド	無 標	10
	有 標	13

4.4. 内容と述語の形との対照結果

述語の形に関しては上に掲げたように分析された。その結果次のようなことが言えると思われる。

- ①変動部に比べて無動部や語り手関与部は文の種類が集中していない。
- ②変動部はすべて動詞述語である。
- ③変動部は2例を除けばすべて過去時制であったのに対し、無動部と語り手関与部は現在時制が多く、特に語り手関与部は1例を除いてすべて現在時制である。
- ④変動部にはAspectが有標のものがひとつもなく、一方無動部はAspectが有標のものの方が圧倒的に多い。
- ⑤変動部と無動部に比べ、語り手関与部の文にはムード形式が有標であるものが際立って多い。

5. 全体の考察

物語文に関して結果的に次のようなことが考えられる。

- ①物語文は変動部と無動部と語り手関与部というみっつの部分からなっている。その物語の中で全体に一貫して通じている時間軸に沿ったできごとの部分が変動部であり、この部分はそそだけ読んでもほとんど不自然さを感じない。すなわち、この部分の存在によって物語は進展していくのであって、この部分こそが物語の根幹であり、核とかるあらすじを形成していると言える。また、この変動部にあらわされるできごとの前後の状態

をあらわすのが無動部である。この変動部と無動部とがひとつになって話の流れそのものを形作り、それを語り手関与部が補足説明していると言える。語り手関与部には、場面の枠組み設定、主要な時間の流れからはずれた時間軸に従うものごと、語り手の意見、語り手による関係要素の心情表現などが含まれる。

② みっつの部分はそれぞれ文法的な要素とある程度の関連を持っている。変動部を特徴づけるのは過去時制とアスペクトの無標性であり、無動部を特徴づけるのはアスペクトの有標性、語り手関与部を特徴づけるのは現在時制とムードの有標性である。

③ 4.3. の①でも述べたように、変動部は無動部や語り手関与部に比べ、文の種類にばらつきがない。すなわち変動部の文は相互に強い関連性を持つと言えよう。典型的には動詞述語で過去時制、アスペクトは無標というのが変動部の文であるが、中にはもちろんこれに反するものもある。本稿で例として用いた『蜘蛛の糸』においては、例えば、

(9) 何気なく毬陀多が頭をあげて、血の池の空を眺めますと、そのひっそりとした暗の中を、遠い遠い天上から、銀色の蜘蛛の糸が、まるで人目にかかるのを恐れるように、一すじ細く光りながら、するすると自分の上へたれて参るのではございませんか。(第二章 2—2)

(10) ところがふと気がつきますと、蜘蛛の糸の下の方には、数限りもない罪人たちが、自分ののぼったあとをつけて、まるで蟻の行列のように、やはり上へ上へとぼって来るではございませんか。(第二章 5—5)

の文はこの典型に該当しない文である。これはどちらも「～スルト……～デハナイカ」という形をとっている。これらの文は物語に不可欠なできごとの進展の描写部分であって、当然変動部に属すると考えられるが、このように後半が否定疑問の形になっていることからわかるように、単なる事実の描写に留まらず、語り手が顔を出している。これらの文の文末述語を含む節は従属節の述語の内容をあらわしている（それぞれ「……を眺めた」「……に気がついた」と言い換えることができる）のであって、ふつうの主節、従属節の関係とは多少異なり、内容上の主述が構造上の主述にまで影響を及ぼした文であると言えよう。例えば、

(11) そのとき暗い部屋の中で何かが動いたのに気がついた。

(12) 遠くにイルカがいるのが見えた。

(13) 彼は昨日は一日部屋にいたと言った。

のように断定性の動詞を主節の述語として持つ文では、しばしば従属節の述語の示す内容の方が主節のそれよりも重要な意味を持つことがある²⁾。上に掲げた(9)と(10)も文末の述語は内容的な重要性のために構造上でも文末に出て主文の述語となったものだと考えられる。「……を眺めた」や「……に気がついた」という本来の形と比べて、「眺めると……」「気がつく」と……という形の文では、その行為を行った主体の受けた感覚・感情がより直截に伝わってくる。構造上のこの変形は語り手の頭の中でなされたものであり、語り手は（おそらくは無意識の）その操作によって場面をより生き生きと描写しようとしていると言える。

④ 述語の形は物語の印象に大きな影響を与える。例に用いた『蜘蛛の糸』は全部でみっつ

の章からなるが、第一章と第三章が極楽を舞台に非常に静的な印象を与えるのに対し、第二章は地獄を舞台に犍陀多の脱出の試みとその失敗を描いて非常に動的である。章によるこういった印象の違いは、頻用される述語の形の違いによっても裏付けられる。第二章はほかの章に比べて語り手関与部の文が多いことがひとつの特徴である。第一章は全 14 文のうち 6 文 (約 42.9%)、第二章では全 33 文のうち 15 文 (約 45.5%)、第三章では全 5 文のうち 2 文 (40%) が語り手関与の文である。また、ムードが有標であるということを条件に見てみると、第一章では全 14 文中 2 文 (約 14.3%)、第二章では全 33 文中 11 文 (約 33.3%)、第三章では全 5 文中 2 文 (40%) となる。第三章は全文数が少ないのであまり意味がないが、第二章においては語り手が積極的に関与しており、単なる事実描写ではなくできごとをより生き生きと鮮やかに再構成しようとしていることが見てとれる。このように、述語の形は物語文の与える印象と密接な関係を持っているのである。

6. おわりに

本稿では物語文の内容と個々の文の形との関連について、主に述語の形に注目して述べてきた。現時点ではまだ大まかな傾向性をつかんだにすぎず、また、例えば Hopper (1979) がテキストの前景部の特徴として種々の要素を挙げたように、ほかにも主語の選び方などに関してテキストの内容と形とは密接な関連を持っていると考えられる。こういった点の解明を次の課題として、さらに深く分析していく必要があろう。

注1) 本稿中で、動詞の時制に関して「現在」および「過去」と称しているものは、すべて、いわゆる「ル形」および「タ形」のことである。特に「現在」に関しては「非過去」とする方がよいかと思うが、便宜上このように記しておく。

2) Hooper (1975), 福地 (1985), 大江 (1984) 参照。

〔主な参考文献〕

- 芥川龍之介 (1918). 「蜘蛛の糸」. (角川文庫版. 1989. 『改編 蜘蛛の糸・地獄変』)
 Hooper (1975). On assertive predicates. In *Syntax and Semantics*, Vol. 4. Kimball (ed.). New York: Academic Press.
 Hopper (1979). Aspect and foregrounding in discourse. In *Syntax and Semantics*, Vol. 12: *Discourse & Syntax*, Talmy Givón (ed.). New York: Academic Press.
 福地肇 (1985). 『談話の構造』. 大修館書店.
 池上嘉彦 (1986). 「日本語の語りのテキストにおける時制の転換について」. 『記号学研究』6, 61-74.
 Labov (1972). The transformation of experience in narrative syntax. In *Language in the Inner City*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
 Longacre (1983). *The Grammar of Discourse*. New York: Plenum Press.
 牧野成一 (1983). 「物語の文章における時制の転換」. 『言語』12 (12), 109-117.
 大江三郎 (1984). 『英文構造の分析——コミュニケーションの立場から——』. 弓書房.
 曾我松男 (1984). 「日本語の談話における時制と相について」. 『言語』13 (4), 120-127.
 Weinrich (1971). *Tempus: Besprochene und erzählte Welt* 2. Aufl. Stuttgart: Kohlhammer. (第三版 1977. 協豊他訳. 1982. 『時制論』. 紀伊國屋書店).

(筑波大学大学院 文芸言語研究科 応用言語学)